

仮説：長居障がい者スポーツセンターの将来像

～ 共生社会を実現させる大阪市障がい者スポーツの「プラットフォーム」～

第1回

大阪市長居障がい者スポーツセンターのあり方検討会議

令和元年6月21日

目次

1. 仮説:長居障がい者スポーツセンターの将来像	3
<hr/>	
2. 長居障がい者スポーツセンターの概観	4
<hr/>	
3. 障がい者スポーツのトレンド	5
<hr/>	
4. 障がい者スポーツに求められること	6
<hr/>	
5. 長居障がい者スポーツセンターが担う役割	7
<hr/>	
6. 仮説:長居障がい者スポーツセンターの将来像(まとめ)	8
<hr/>	

仮説：共生社会を実現する大阪市の障がい者スポーツの「プラットフォーム」になる

1. 仮説：長居障がい者スポーツセンターの将来像

共生社会を実現する大阪市の障がい者スポーツの「プラットフォーム」になること

～10～20年後の姿～

【長居障がい者スポーツセンター】

～ 共生社会を実現する
障がい者スポーツの「プラットフォーム」～

長居障がい者スポーツセンターは、これまで個人的利用に重点を置いた施設機能を配置し、運営を行ってきました

2. 長居障がい者スポーツセンターの概観

1

1974(昭和49)年に全国で初めて「障がい者スポーツセンター」として開設され、障がい者スポーツセンターといえば「長居」と呼び名も高い在宅の障がい者がいつ、一人で来館しても指導員や仲間がいて、安心してスポーツを楽しむことができる施設として設立

2

運営面では個人利用に重点を置き、健康増進、機能回復(リハビリ)や小規模グループのスポーツを通じたコミュニケーションを図れる場となっています。また、昭和56年には重度障がい者(児)体育訓練施設が増設されました

3

個人利用に重点を置いた施設のため、競技大会を実施できるスポーツ競技の公認施設ではなく、大規模なイベントは「舞洲障がい者スポーツセンター」で開催されています

4

大阪府下及び他府県からの利用者もみられ、平成29年度の年間利用者数は延べ37万人となっています

今後、障がい者スポーツの概念が大きく変化するものと考えます

3. 障がい者スポーツのトレンド

先進的な西欧諸国

ヨーロッパではそれぞれの国ごとに障がい者スポーツ組織があり、取り組みも進んでおり、障がい者スポーツが定着(中でもドイツにおいては長い歴史を持っている)しており、障がい者が健常者と同じように活動できる環境が整備され、日本とは大きく異なります。

日本と異なる点

異なる理由は「国による制度・施策」「障がい者スポーツ運動(認知・普及)」「障がい者への理解」「支援体制」の違いが影響しているといわれています。

障がい者スポーツを取り巻く環境の変化

障がい者スポーツはこれまで健康維持、機能回復のためのスポーツであったものが、現在では競技を目的としたものへと発展しています。また、スポーツ基本法の施行(2011年)、スポーツ基本計画の策定(2012年)、東京オリンピック・パラリンピック開催、また障がい者スポーツの多くの事業が厚生労働省から文部科学省(スポーツ庁)に移管(2014年)するなど、障がい者スポーツをとり巻く環境が大きく変化しています。

障がい者スポーツのトレンド

今後は障がい者スポーツの概念が大きく変化し、障がい者スポーツを「参加」するスポーツ、更には「国際化」「ビジネス化」が進み、社会を大きく変える要素になると思われます。

長居障がい者スポーツセンターの役割は大きく4つあると考えます

4. 長居障がい者スポーツセンターに求められること

1. いつでも、だれでもスポーツに親しめる機会を創出する

2. だれもが共にスポーツを楽しめる機会を創出する

3. 障がい者スポーツを通して社会を変える機会を創出する

4. 障がい者スポーツが「共生社会」*を実現する支えとなる

*「共生社会」とは:「障がい者スポーツの意義や価値が社会に広く共有され、誰もがスポーツの価値を享受できる社会」と位置づける

長居障がい者スポーツセンターは共生社会を実現させる支えになると考えます

5. 長居障がい者スポーツセンターが担う役割

+ 共生社会

+ 競技

健康増進・リハビリ

- 障がいのある人々の身体的運動能力の向上のためのスポーツとして定着
- 医師や体育指導師により「治療体操」のスポーツとして定着

- 様々なスポーツイベントが広がる
- パラリンピックをはじめ競技を通じて障がい者スポーツが認知されはじめ、一部有料としたビジネス化の試行が始まる

- 障がい者スポーツの認知度と価値が向上している
- 関わる全ての人々が共に成長し、共に楽しみ、その経験を分かち合うスポーツになる
- 地域における障がい者スポーツが普及促進されている
- 制度、支援体制、施設の環境が充実し、新たなスポーツ文化(ビジネス)としても確立している

【利用者】

利用者は限られていた

利用者は増加傾向にある
が在宅者率はまだ高い

多くの人々がスポーツを楽しみ、親しむ中でスポーツの価値を享受している

【役割】

健康・機能回復の支えとなる

競技を通して交流が広がる
支えとなる

共生社会を実現させる
支えとなる

仮説：共生社会を実現する大阪市の障がい者スポーツの「プラットフォーム」になる

1. 仮説：長居障がい者スポーツセンターの将来像(まとめ)

【長居障がい者スポーツセンターの将来像】

～ 共生社会を実現する大阪市の障がい者スポーツの「プラットフォーム*」～

* 「プラットフォーム」とは、単に障がい者と障がいのない人が集まってスポーツする場であるとの狭義な意味ではなく、障がいスポーツの「イノベーション」を起こす「場」になる、との位置づけ(期待)をもったもの。

・利用者、各種団体、行政、民間企業、大学機関など様々な関係者が行き交い、サポート、人材育成、技術開発、情報発信、地域振興に係る中で今までの枠にとらわれない行動からイノベーションが起こり、障がい者スポーツ全体の底上が進み、共生社会が実現される。そのようなビジョンを描いています。

【長居】：プラットフォーム

「周知・広報」「事業企画」「健康増進支援」「機能回復支援」
「生涯スポーツの促進」「指導者の育成」「アスリート育成・支援」
「ボランティア育成」「諸団体との連携体制構築」

「障がい者スポーツのイノベーション」

【各区施設】：地域スポーツの振興
身近な地域における障がい者
スポーツの普及促進

【舞洲】：競技拠点

「健康増進支援」「機能回復支援」のほか「卓球大会」「水泳大会」「インドアアーチェリー大会」「ボッチャ大会」「ボウリング大会」等の各種イベントの開催